

長野県革新懇ニュース

2021年9月号
発行日9月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 00510-3-15971

267

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 中澤誠人さんインタビュー
- 2面 1面続き、「近現代信州の歴史回廊」小平千文さん
- 3面 「総選挙で核兵器禁止条約に調印する政府を実現しよう」読者の声、漢字パズル
- 4面 雨よ降れ「詠まぬ人、歌わぬ人」窪島誠一郎さん
写真で辿る信州と戦争「敗戦二日前の空襲」北原高子さん
映画評論『ファーマー』 内山到さん

長野県革新懇

検索



1994年、松本市生まれ。信州大学繊維学部卒業後民青の専従になる。2018年民青同盟長野県委員会副委員長、2019年委員長 趣味: 高校野球観戦、釣り

食料支援活動を通じて

政治のあり方を問う

中澤 誠人さん

(民主青年同盟長野県委員長)

2000人に
食料などを提供

Q 食料支援活動に取り組んだきっかけをお話してください。

そもそもは去年の5月頃に高知県の民青が食料支援活動に取り組んで大きな反響を呼びました。コロナ禍のもとで学生や若者が困窮化しているという事は当時から問題視されてはいたのですが、長野県では実家や知り合いが農家なのでお米や野菜は足りているという人が結構いたので、率直に言うとなりにどの程度困っているのかということについてはあまり実感が持てませんでした。しかし、高知の取り組みで、ご飯も食べられないような学生がいるということが分かったというところで、そこからこの取り組み

が全国的に広がっていった経緯があったので、とにかく長野県でもやってみようと思いたわけです。最初は信州大学松本キャンパスで、昨年8月に食料配布を行いました。実は、夏休みの直前で学生も帰ってしまうので、10人

来れば上出来かなと思っていたんです。だから50食分しか用意しなかったんですが、15分ぐらいで全部なくなりました。まだまだ列が並んでいる状況だったので、急いでまた20食分セットを用意し配布した経緯があります。やっぱり本当に困っている人はいるんだということで、継続してやっていたということになりました。

それが契機となって、信州大学以外の他の大学にも広がっていききました。昨年の夏から数えて全県で36回行い、利用者は延べ約2000人です。場所は、松本キャンパスを始め、長野市の信大工学部と教育学部、松本大学、上田市の長野大学、佐久大学、さらに茅野にある諏訪東京理科大学でやっています。今まで私たちの活動は信州大学を中心にやっていたのが強かったのですが、困っている学生は信大だけじゃないということ、地域の同盟員とも協力しながら、いろいろな大学で食料配布を行ってききました。

提供する物は地域によって違いますが、スタンダードなのは、お米を一人2kg分、あとカレーなどのレトルト食品やカップラーメン、それと缶詰で、それらを基本にしています。これらはこの活動に共感してくれる方々のカンパで賄っています。野菜や果物ですが、これは本当にありがた

いことに支援の方が送ってくるので、それは必要な分量を持っていいよというようにやっています。加えて最近では生理用品が高いということ、そういう日用品類も配ることにしています。

コロナ禍で孤立と
経済的苦境

Q コロナ禍の下での学生の状況はどうですか？

ある学生の話ですが、最近ようやくアルバイトができるようになったけれども、短時間なのでいくつかの掛け持ちにならざるを得ない。その学生は夜までゼミがあったりするの、そういう時は寝ないでそのまま朝まで待って早朝のコンビニのバイトに行くと行くということ。本当はそこまでして働きたいわけではないけども、生活ができないので働かざるを得ないと言っていました。多少なりとも生活に余裕があれば苦しい思いをしなくて済むの、という声

が本当に多く聞かれます。アルバイトが足りない、生活が考えられない、そこでコロナで駄目になってしまつと、生活ができなくなってしまうのです。生活が苦しいということと、孤立しているということと、ともに、孤立しているということがあります。オンライン授業だとキャンパスに来れないので、昨年だと本当に一歩も外に出ない学生もいました。そういう学生がようやくキャンパスに来て、なかなか友達関係が築けないわけですが、民青に入ってくれたある

2年生は、相談する相手とか友達ができないし、授業もついていけないので、体調も崩しやすくなったと言っていました。そういう孤独感のために精神的にまいってしまう学生も中にはいます。また、休学や退学を考えている学生もいました。コロナが流行り始めた頃は、バイトができないから生活できなくて学費がやっぱり払えない。親もちょっと払えるかわからないということ、退学とか休学も覚悟していたけれど、たまたま親戚がお金を貸してくれてということ、なんとか通っているという学生もいました。コロナの流行前はそういう話を聞かなかったのですが、それだけ深刻な事態になっていると思います。

支援活動に自ら
参加する利用者も

Q 利用者や活動参加者の皆さんの受け止めはどうですか？

利用者の受け止めは様々で、貰えるらしいから貰いに来ると人もいれば、アルバイトができないので明日のご飯をどうしようということ、で本当に助かるという人もいて、いろんな思いを持った学生が来ています。

ある大学の経験ですが、利用者さんがスタッフや参加者の顔ぶれを見て知り合いが少なくて良かったと話していました。つまり、貰っているという現場を友達に知られたくないという思いがあるんですね。今の若い人は自己責任論が浸透している、苦しいのは自分のせいだという思い

込みが強いと思います。だから、貰いに行くという事だけでも決断が必要で、ある意味でためらいを乗り越えてきているんだと感じています。

この活動は、最初は民青だけでやっていましたが、その後、食料支援を手伝いたいという人も出てきたので、その人たちに加わってもらおうと、信大では食料配布実行委員会という団体を作ってより広い取り組みにつなげてきています。コロナ禍で活動が制限されているけれども、それでも何かしたいと思っている学生も一定数いて、そういう学生には一緒にやろうと呼びかけて提供側に回ってもらっています。そうした学生自身も決して余裕があるわけではありませんが、食料配布とかボランティアのスタッフの姿に励まされて、自分も何かしたいという思いを持って協力してくれる人もいます。

異常に高い学費が
学生生活を直撃

Q コロナ禍でこれほどまでに学生の貧困が進行した背景をどう考えますか？

本質的には学費が異常に高いということがあると思います。国立の場合、年間1年生は初年度納付金を含めると82万円、2年生以降だと57万円です。私立大学はもっと高いです。学費が高からアルバイトに依存せざるを得ないわけで、学業も疎かになりがちです。

生活が苦しいという話を聞く中で、日本の学費は世界で